

- I. 原稿募集
- II. 村上祐子 「科学史サマースクール」参加報告
- III. 松本俊吉 「国際学会武者修行記（後篇）」
- IV. 研究会予告 「数学と論理の哲学」シンポジウムのお知らせ
- V. 編集後記

I 原稿募集

科学哲学会ニュースレターは今年からオンラインのみで発行される情報共有のためのニュースレターとして再出発しました。さまざまな研究会の活動、海外の学会の参加報告、ご自分が研究されている分野の最近の研究動向など、情報交換の場として活用していただくと幸いです。ニュースレターに投稿を希望される方は、科学哲学会事務局までご一報ください。

II 「科学史サマースクール」参加報告

東北大学
村上祐子

2010年科学史サマースクールが2010年8月4-6日に立教大学池袋キャンパスで開催された¹。今回のテーマは『大学変革期における「科学の教養」：「科学の○○」科目をどう教えるか』であり、サマースクールの企画名に冠された科学史だけではなく、科学哲学・STS・科学コミュニケーション実践まで拡大して、「科学の教養」について議論することが目指された。

このサマースクールは数学史研究会有志により2008年から開催されており、2008年の発表をまとめた報告書が中根他(2008)²として出版されている。また、2009年には科学史教育実践報告のほか、「非常勤をはじめたら科研費に応募しましょう」といった若手キャリア形成支援に関する内容も含み、科学史コミュニティの将来についての議論が交わされたとのことである³。

今回のサマースクールは企画運営が「数学史研究会有志」から「プロジェクト#1701・サマースクール2010実行委員会」となっている。#1701とは、「科学社会学・科学技術史」に対応する科学研究費補助金の分科細目コードであって、歴史的経緯から科学哲学・科学基礎論一般を含み、高等教育の枠内では「科学に関する教養」に関わる分野とみなせる。このよ

うにサマースクールの対象領域が拡大されるに至ったのには、いくつかの学会で教育に関するワークショップを組織している際に学会連携の試みについて柳生孝昭氏からご示唆を頂いたことがきっかけとなっており、このサマースクールに先立って、日本科学史学会シンポジウム⁴でも連携を呼びかけた。実際、教育ワークショップ・シンポジウムなどの議論の場、また教育ワーキンググループの立ち上げなどの動きは、日本科学哲学会のみならず、多くの学会で同時並行的に行われているが、その間の情報共有・日本学術会議等上部組織への連携した働きかけなどはあまり行われていなかった。しかも#1701の関連学会は非常に多い。学会の林立については諸般の歴史的経緯があることは重々承知しているが、関連領域内で対立していられるだけの余裕があるような状況なのだろうか？

実際に共通の課題がある。#1701関連科目は、専門家養成機関の数は少なく、多くのアカデミックポジションは教養課程におかれていた。しかし、1991年の大学設置基準大綱化⁵で、「大学の開設する授業科目を「一般教育科目」、「専門教育科目」、「外国語科目」、「保健体育科目」に区分すべきこと、また、それぞれの科目につ

いて卒業までに修得すべき単位数などを定めていたところを、個々の大学が社会の要請に適切に対応しつつ、より一層特色ある教育研究を展開することができるようにするため、これらの開設授業科目の区分や必修単位数などに関する規定を撤廃⁶」したことにより、各大学にとって教養課程だけを担当する教員ポストを維持する動機は消滅した。つまりアカデミック労働市場における団塊世代の置き換え需要はとくに旧教養課程ポジションに関しては自明でない。したがって、これらの分野の研究コミュニティの次世代のポストを確保するためには、「科学の○○」教育の意義をコミュニティの外に向かって明示的に提案しなければならない。

この認識のもとに、科学史コミュニティから提案されたのは、まず「役に立つ科学史教育」のアイデアである。OECDのDeSeCoで定義されるキー・コンピテンシー対応、また諸般の「学士力」関係の育成に科学史教育は有用であるとの売り込みを行うことで、需要喚起をねらう。また、科学史を授業で扱うことは科学そのものの理解につながるという主張もなされた。実際にアメリカ数学協会では、中等教育教員を主対象として数学史の最先端についての講習会も行われているとのことである。

科学史以外の分野からは、おもに科学史コミュニティに対して各分野の意図を紹介する目的での発表がなされた。STSからは、STSという領域そのものの歩みについての報告がなされた。また科学コミュニケーションの現場からは、最終的には政策形成につながる提言を行う活動として科学コミュニケーションを位置づけるべきであり、教育に関しても科学イベント実施に矮小化されない形で行うべきという主張がなされた。哲学からは名古屋哲学教育研究会の活動報告および哲学史・科学史的観点からの「脳科学と疑似科学」の話題提供がなされた。

この議論を経たうえで、元の疑問「# 1701 関連学会連携は可能か？」に立ち返ると、連携活動及び情報共有は確かに必要であると思われるが、「哲学コミュニティが外部に何を提案できるのか？」という疑問は深まった。この疑問を問いつけることが今後の活動につながっていくことになるだろう。

¹2010年科学史サマースクール <https://sites.google.com/site/kagakushisummerschool/> (最終アクセス: 2010/09/27)

²中根他(2008)「科学の真理は永遠に不変なのだろうか—サプライズの科学史入門—」ベレ出版。

³2009年科学史サマースクール <http://homepage3.nifty.com/michiyo-nakane/> (最終アクセス: 2010/09/27)

⁴日本科学史学会シンポジウム報告書は「科学史研究」で出版される予定である。

⁵2004年の国立大学法人化による影響も無視できないとはいえ、この問題についてより深刻な要因は大学設置基準大綱化である。

⁶文部科学省「Q1 大学のカリキュラムなどの教育内容はどのような考え方で決められるのですか。また、教育内容の改革として、具体的にどのような取組が進んでいるのですか。」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/001.htm (最終アクセス: 2010年9月27日)

香港国際空港に降り立ったときは、東京やソウルよりもはるかにむっと蒸せかえるような暑い空気に包み込まれた。香港は、摩天楼とモダンな町並みでよく知られた香港島と、香港アクション映画に出てくるような危険な臭いの漂う九龍地区と、比較的殺風景な新興開発地である新界地区の3つの地区からなる。その夜は出迎えに来てくださった **Sesardic** さんの車で **30km** あまり、嶺南大学のある新界地区 (**New Territories**) に向かった。途中新興開発地だけあって、海岸沿いに、積み木を一列に空高くまで積み上げたような、総床面積の極端に小さい超高層アパートメントが、あちこちに林立していた。耐震強度は大丈夫なのだろうかとちょっと心配になるほどだった。午後 **11** 時過ぎにキャンパスに着いてさっそく案内された訪問者用宿泊施設 (**visitors' quarters**) は、大型冷蔵庫付きのキッチンを含め、**3LDK** の新築マンションのような快適なものだった。

嶺南大学は、香港郊外にあるリベラル・アーツ系の小規模な大学だが、国際化路線を大学の表看板に掲げている。それだけに、哲学科の十数名いるファカルティーも、生粋の中国人は三人だけ（それも米国や英国で学位を取った人）で、あとはすべて欧米人だった。採用はすべて公募で、世界中から志願者が集まるという。日本にもいくつかある「××国際大学」的なイメージの大学と言えはわかるだろう。コンピュータ科学の哲学者から倫理学者からニッチ専門家から美学者まで含む、多彩な顔ぶれだった。中には世界的に活躍しているような人もいる。

私のセミナーは翌 **9** 月 **14** 日の午後 **4** 時半からだったが、その日の午前ホストの **Sesardic** 氏は、嶺南大学哲学科のファカルティー一人一人に私を紹介して下さり、また **5**～**6** 人のファカルティーとランチを共にする場もセッティングして下さった。私の本番での緊張感をあらかじめ和らげてやろうという心遣いなのだろうか。実際そのおかげで、本番は右上の写真のように多くのファカルティーに取り囲まれ（総勢二十名くらいの参加者の内、ファカルティーは十数

名）、まな板の上の鯉のような状況だったが、不思議と緊張することもあることもなく、リラックスして話をする事ができた。



嶺南大学哲学科でのセミナー。右側手前がホストの **Sesardic** 氏

嶺南大学での演題はソウル大学のときと全く同じものにした。学生たちの質問が多かったソウル大学での講演とは対照的に、嶺南大学では、1時間の講演の後の **50** 分ほどの質疑応答の間、徹底的にファカルティーからの質問の集中砲火にさらされた（結局その場の雰囲気は怖じ気づいてしまったのか、学生からの質問は最後まで一つもなかった）。とは言え、質問は（なかには結構辛辣なものもあったが）後に述べるように概して友好的かつ建設的なもので、私も英語での質疑に苦勞しながらも、爽快な気分で楽しく受け答えをしているうちに、あっという間に **50** 分が過ぎてしまったという感じだった。1時間の英語での講演は、内容をほとんどすべて丸暗記して頭の中に入っていることもあって、問題なくこなすことができたが、（日本人と英語のレベルが似たり寄ったりのソウル大学の人々とは異なり）ほとんどがネイティブあるいは日常的に英語を使って生活しているファカルティーにざらっと囲まれての英語でのやりとりはやはり大変だった。デジタルレコーダーで録音した彼らとのやりとりを帰国後聞くと、流れるようなよどみない英語とは程遠い訥々とした要領を得ない英語で、しかも時たま質問者の意図を取り

違えてトンチンカンな受け答えをしている箇所もあったりして、いまから思えば顔から火が出るようなものだが、しかし彼らが辛抱強く私と言わんとしていることを理解しようと努めてくれたおかげで、かなり内容の濃いディスカッションができたように思う。

ソウル大学でもそうだったが、特にこの嶺南大学でのセミナーでは、以下のような収穫を得た。これまで私は、批判を恐れて「完全理論武装」して学会発表に臨むという意識が強かった—そしてそんなことはどだい不可能だからフラストレーションを募らせていた—のであるが、今回のような経験を通じて若干私の気持ちにも変化が生じた。すなわち、敢えて未完成なアイデアを人前にさらしてでもディスカッションを通じたシナジー効果を楽しむとでも言うべき感覚である。例えば今回ソウルと香港でした講演の中で私は進化心理学の「進化的機能分析」と呼ばれる推論パターンには論点先取ないしは論理的循環が含まれているのではないかという主張を展開したのだが、この論点はすでにこれに先立つ **ISHPSSB Brisbane** 大会での準備段階で、一緒にセッションを組んだブリティッシュ・コロンビア大学院生の網谷君からも今ひとつ説得力に欠けるという批判を頂戴していた。しかし私は、この論点は完全無欠なものではないとしても、進化心理学というリサーチ・プログラムの問題点をあぶり出すという点ではかなり重要かつ面白いものだ（手前味噌だが）感じていたので、敢えてこれを隠さずぶつけてみた。案の定、ソウルでも香港でも、質問や批判の多くはこの論点に集中した。しかし私は、極度に批判を恐れていたかつての私とは異なり、彼らとのやりとりを楽しむことができたばかりでなく、今後この論点を練り直していく上で有益かつ貴重なヒントをいくつか得ることができた。例えばソウル大学で極東科学史を教えている **Jongtae Lim** 教授は、いまとなってはあまり証拠の残っていない過去の人間社会の出来事を推定する歴史学の方法論の中にも、似たような問題が共有されている、したがってこれは進化心理学にのみ固有の問題ではないと指摘してくださった。また嶺南大学で心の哲学を研究している **Trogon Kelly** 氏は、「あなたの進化心理学批判には大いに共感するところがあるが、循環論法

の指摘は果たして的を射たものかどうか若干疑問がある。ここで私が、進化心理学者だったらこう考えるのではないかというシナリオを一つ提示するので、これが妥当なシナリオかどうか、そしてあなたの循環論法批判から免れているかどうか指摘して欲しい」と前置きして、一つの可能なストーリーを描いてみせてくれた。そしてこの **Kelly** 氏が描いたシナリオに他のファカルティーが反応して、どんどんと議論が発展していった。

このように、たとえ突っ込もうと思えばいくらでも突っ込める穴のある議論であっても、発表者の意図を汲んで、一緒にその問題を解決する方途を探ってやろうという彼らの鷹揚かつ議論そのものを楽しもうという態度は、私を爽快な気持ちにさせてくれた。そこには、発表者の意図を理解しようとせず揚げ足取り的な質問によって研究会を自らの知識と詭弁のデモンストラーションの場と化してしまうような輩は存在しない。

セミナーの翌日、**Kelly** 氏とその奥方の **Ellen** さんに案内してもらって、香港島と九龍地区を半日かけて探索した。折悪しく台風が香港を通過した直後で雨風とも相当強い悪天候下での（遠足）となったが、このセメスターに米国から香港に着任したばかりの **Kelly** 氏や奥様自身にとっても初めてとなる場所も多く、二人とも私と同じくらい楽しんでいただようだった。

* * *

最後の目的地の上海に着いたのは9月16日、上海空港から延々と1時間以上かけて、復旦大学のある上海の市街地まで、出迎えに来て下さった **Wei**（魏）さんと一緒にバスで移動した。中国のドライバーの運転の荒っぽさには驚いた。日本なら、一般ドライバーはまだしも公共交通機関の運転手は安全運転を心がけるものだが、上海ではバスの運転手からして乗客が危険を感じるほどの猛スピードで爆走し、パッパラパーとクラクションを鳴らしまくり、方向指示器も出さずにヒューッと進路変更したり、ちょっとした隙間に強引に割り込もうとしたり、挙句の果てに他のドライバーと路上で心理戦を繰り広げたりと、まあすごいことすごいこと。それも好意的に見れば、かつて私が生まれた60年代の成長期の日本がそうであったように、社会が

エネルギーと活力に満ちているということの証左なのだろう。上海は、**2010年**に中国の威信をかけて開催する万国博覧会の会場になっており、あちらこちらで大規模な道路工事や建設工事が進行中で、その結果街並みは殺風景で、都心部の渋滞は東京をはるかにしのぐほどのクレイジーなものだった。できれば都市整備が完了してきれいに変身した上海に、来年の万博のときなどに再訪してみたいものと思った。

復旦大学は、北京大学、精華大学に次ぐ、中国で**No.3**のランキングの大学だそうである。上海の市街地に非常に広大で立派なキャンパスを構えている。上海での滞在場所は、復旦大学の来客用ホテルだったが、これもまったく街中の一流ホテルと較べて遜色ないほどの立派なものだった。私の講演は翌々日の**18日16時**からだったので、翌**17日**はホストの**Wei**さんに、上海からバスで数時間行ったところにある、郊外の周荘という名所を案内してもらった。ここは「東洋のベニス」とも言われる古代の水郷地で、古き佳き中国の美しい景色が広がっていた。**19日**の午前は、今度は**Wei**さんに上海市街をあちこち案内してもらい、その後夕方からの講演に望んだ。



復旦大学

復旦大学での講演は、セミナーというより、**Wei**教授の授業のゲストスピーカーといった雰囲気のもので、彼の授業を履修している二十数名の学生が集まっていた。ただし、学内のあちこちに、外注して作ったという不相応なほど立派なポスターがあらかじめ貼りめぐらされていたので、興味を持ったファカルティーも何人か参加されていた（ただし**Wei**教授も知らない人で、哲学科ではなくどうも

生物学科の教授らしかった）。ここでの演題は、ソウルや香港のものとは異なり、“**The Structure of Adaptationism: What is the Essence of Evolutionary Explanation?**” というものにした。これは私がかつて**2004年**に日本哲学会の共同討議で行った発表に手を加え、**2008年**ソウルで開催された世界哲学会議（**WCP**）で報告したものをさらに発展させたものである。これは自然選択による進化の説明の範囲と限界の画定という生物学（進化論）の哲学の根幹にかかわる問題で、グールドとルウィントンによる適応主義批判（**1979年**）を紹介し、それに対するデネットなど適応主義者の側からの反論を検討し、両者の一種の調停策としてラカトシュの意味での「リサーチ・プログラム」としての適応主義というアイデアを提示するといった内容のものである。ここでも私の講演は1時間あまり、その後の質疑応答は優に1時間を超えるものとなった。



復旦大学でのセミナー。私の向かって右側がWei教授。

非常に印象的だったのは、復旦大学哲学科の学生たちの熱心さ（特に話を聞いているときの彼らの真剣な目の色）と理解力の高さである。**Wei**さんによれば生物学の哲学の研究者は中国にはまだほとんど存在しておらず、したがって学生達が大学でそれを学ぶ機会ほとんど皆無であるにもかかわらず、質疑応答時に私に向けられた質問は非常に的確なものが多かった。きっと彼らは独学的な読書によって自分の専門外の事柄にも幅広い興味とリテラシーを持っているのだろう（もっともポスターを見てやってきた、**Wei**さん自身も見たことのない生物学科の学生もかなり混じっていたようだが）。また、トップ大学の中国人学生の英語力は概して日本人や韓国人より数段上である。（このことは、嶺南大学

で **Sesardic** さんの演習を聴講したときにも強く感じた。) 経済のみならず、学問研究においても中国は今後末恐ろしい国になるなど実感した。

ともかく、今度はファカルティーからの質問はなかったが、学生達からは非常に活発に質問が飛び交い、少し話が専門的すぎて消化不良を起こすかなという私の心配は完全に杞憂に終わった。ホストの **Wei** 先生も大変喜んでくださった。

* * *

かくして私の 10 日間の講演旅行は、なんとか無事に終了した。次回の **ISHPSSB** の大会は、2 年後の **2011** 年に米国のユタ大学で開催されることが決まっている。国際学会に参入して活躍することは、当然言葉の問題も大きく、最初はかなりのストレスとフラストレーションを覚悟せねばならない。プレゼンテーションが不味くても、原稿棒読みでも発表内容がよければ大目に見てくれるだろうという甘えは通用しないので、オーディエンスの興味を喚起しうだけの議論を地道に構築していく努力もさることながら、

英語でのディスカッション能力やプレゼンテーション能力を磨くことにも、かなりの時間とエネルギーを投入せねばならない。しかし、そうしたトンネルをかいくぐった先にわずかに見える光があればこそ、留学経験のない私もこうしてここまで続けてこられた。最初は自分の英語が果たして本当に通じているのかどうかさえよくわからないところから出発したが、回を重ねる事に、自分の議論を理解し、興味を示してくれ、あるいは丁寧にコメントないし反論してくれる人が増えてくるのは何とも言えない醍醐味である。まだまだメインプレーヤーとして認知されるには遠い道のりだが、この方向でどこまで行けるかやってみたく思っている。それと同時に、これを読んでいる読者の皆さんで、もしこうした活動をわれわれと一緒にやってみたくという方がいらっしゃれば、いつでも歓迎したい。とりあえず、われわれが年一度開催している生物学基礎論研究会 (ブログ: <http://h5strings.fc2web.com/pob/index.html>) という有志の研究会に参加されてみてはいかがだろうか。

IV 研究会予告

「数学と論理の哲学」シンポジウムのお知らせ

2011 年 2 月 10 日 - 11 日に慶應義塾大学三田キャンパス東館 6 階で、数学と論理の哲学に関する研究集会を予定しています。参加自由です。異なるフィールドで数学の哲学に関わる研究をされている方々が集まり議論する研究集会です。招待講演者は次の方を含みます。

- ・ **Henk Barendregt** (オランダ王立アカデミー及びニーメゲン大学) 直観主義
- ・ **Mirja Hartimo** (フィンランド、ヘルシンキ大学) フッサールの数学の哲学
- ・ **Mathieu Marion** (カナダ、ケベック大学モントリオール校) ウィトゲンシュタインと数学の哲学

その他の招待講演者情報及びプログラムは追ってお知らせします。参加自由です。最新の情報は次のサイトに掲示する予定です。(<http://abelard.flet.keio.ac.jp>) (慶應大学 岡田光弘)

今年度からニュースレターがオンラインのみになったことにともない、新しい試みとして年2回の発行としてみた。こうすることで、より投稿しやすく、タイムリーな情報提供の場として機能することを期待したい。幸い松本さんからは前号からひき続いて「武者修業」記の後編をいただき、また村上さんよりサマースクールの報告をいただくことができた。とくに、サマースクールは、科学史、科学哲学、科学社会学といった、科学を対象とした文系的研究の諸分野が共通の問題について語り合おうという新しい試みであり、今後のなりゆきが注目されるところである。

(伊勢田哲治)